

「千都の杜」は「兵どもが夢の跡」

副会長・藤井正樹

3. 早ノ道のことなど

河上徹太郎は多摩丘陵の高みに築かれた山城の役割を「東からの敵に備」えたものではないかと推考しているが、永禄12年(1569)に甲州武田勢が小田原攻めのため南進して多摩地方の各所に陣取りをしていることから、これに備えたとも考えられよう。ただし、法基・沢山両城については、その麓が南北に通じる早ノ道と東西に通じる津久井道が交差する交通の要衝であったことから、人々の往来を監視し物流を管理するための基地として築かれたとも考えられる。かつて鎌倉往還のための要路であった鎌倉街道の基幹道路である上ノ道、中ノ道、下ノ道のうち、町田市域を通ったのは市域中央部(鶴間・原町田から北へ野津田・小野路)を縦走した上ノ道だが、その他にも網の目のように張り巡らされた支道や間道を含めて鎌倉街道と総称しており、その1つとして、二俣川・奈良・岡上方面から北上して能ヶ谷を縦貫、広袴・真光寺・黒川に通じて上ノ道に合流した道は早ノ道と呼ばれた。

その早ノ道は能ヶ谷では真光寺川(と川沿いの道)の東に沿って北上しているが、その先の正確なコースは判然とせず、あるポイントからは尾根道を辿ったとも云う。早ノ道の名は、元弘3年(1333)に討幕の兵を挙げた新田義貞が分倍河原(府中市)で北条泰家(執権高時の弟)の軍を破った後、数万騎の大軍を率い鎌倉に攻め入って幕府を滅ぼしたことに由来する。この時、討幕軍の本隊は上ノ道を破竹の勢いで南下して敗走する幕府軍を追撃したが、支隊のうち早ノ道を進撃した1隊がどの隊よりも早く鎌倉入りして一番乗りの軍功を挙げたことから早ノ道と呼ばれるようになったと伝えている。そうであれば、直ヶ谷の名の由来について前々回に引いた地形説と開墾説のうち、真っ直ぐな道が縦貫していたからとする地形説を採って、早ノ道には早駆けのできる真っ直ぐな道の意味が込められていたと考えたい。

白洲正子が『道』(昭和54年刊)所載の「鎌倉街道を行く」に「家の前の田圃道を『鎌倉街道』といった。いった、と書くのは、現在は家が建てこんで、昔の面影を失っているからである。その道は、東の丘を尾根伝いに来て、谷戸へ下り、家の前をはずかいに横ぎって、再び山へ入って行った。わずか一間足らずの山道であるが、よく踏みかためられた歩きよい道で、尾根の上の雑木林からは、富士山が望めた」と記している。私には白洲氏の云う鎌倉街道が現在のどの道筋に該当するのか判別できないが、蛭ヶ岳の背後に山頂をのぞかせる富士の遠景は「尾根の上の雑木林」を切り拓いた「千都の杜」の高みから望見できる。時々刻々変化する山容を眺めていると、古美術に造詣の深かった白洲氏は北斎・鉄斎や大雅・大観、近くは梅原龍三郎など巋頂の画家のうち誰の富岳図に山頂を継ぎ足したのだろう、と想像を逞しくするのである。

なお、河上氏も「都築ヶ岡の風物」に「宅(麻生区白鳥)の近くに鎌倉街道といふ名の村道があるが、周囲の樹は生え変つたに違ひないのに古い道といふものは奥床しい品格があるから面白いものである。但し鎌倉街道といつても、必ずしも鎌倉へ通ふ道ではなく、当時の重要な国道、ロイヤル・ロードといふ意味でも用ひられた名称であるといふことだ」と記している。今日、早ノ道から古道の「奥床しい品格」(河上氏)は喪われてしまったが、それでも能ヶ谷7丁目から広袴にかけての丘の麓や尾根の「多摩の細道」(それらが早ノ道の旧道だとして)には「昔の面影」(白洲氏)と思しき風情が僅かに遺っている。

さて、「尾根の上の雑木林」を拓いた「千都の杜」の高みから変貌著しい市域の彼方に望む富士や丹沢・箱根の連山の遠景は往時のままである。万葉の昔、都筑郡(川崎市麻生区と横浜市北部)から西国に出征する防人が足柄山を越えつつ故郷に残した妻を恋慕して「我が行きの息衝(つ)くしかば足柄の峰這(は)ほ雲を見とと俣はね」と詠んでおり、多摩人にとって関東と西国を隔てる最大の関門は丹沢・箱

根の山塊であったが、豊島郡(豊島・荒川・北・板橋・文京区にまたがる地域)から防人として赴く夫を送り出す妻が「赤駒を山野に放(はか)し捕(と)りかにて多摩の横山(丘陵)徒歩(かし)ゆか遣(や)らむ」と詠った哀別の歌は、「多摩の横山」より東に住んだ万葉人にとっては武相の境界線をなす多摩丘陵が丹沢・箱根の手前に立ちはだかる難所だったことを示唆している。

その後、南北に通じる鎌倉街道は丘陵(難路)を避けて谷戸に沿うように整備されたが、東西に通じる街道は後世に至るまで多摩丘陵や丹沢・箱根の連山が関門となった。二ノ倉山の環境が激変したのもようやく近年のことで、早ノ道の交通・運輸の動脈としての役割は鶴川街道(昭和26年以降、真光寺長津田線として整備。同39年の鶴川団地造成関係工事で拡幅)に移り、雑木や夏草に覆われた「兵どもが夢の跡」は宅地化(イトーピア住宅地と平和台は昭和45年開発許可、「千都の杜」は平成9年事業認可)された。その「千都の杜」では域内に鎮座する能ヶ谷神社の社殿が平成20年に焼失(同22年再建)する憂き目に遭ったが、参道脇に据わる地神塔(文久元年<1861>建立)に「天下泰平五穀豊饒(穰)」と刻まれた150年前の村民の産土神への祈願は、そのまま「千都の杜」の新住民の願いでもあろう。



<早ノ道の面影を遺す「多摩の細道」(能ヶ谷7丁目15辺り)>

最後に私事ながら、地方出身の私は郷土史探訪のディレクターを自任しているが、第2の故郷と思い定めた都下西郊、多摩丘陵の1支丘に展開された歴史には不案内であり、上記の伝承が史実なのか、それとも虚構を含むのか、そして私の独断的な推考がどの程度史実に近接しているのか、正直判らない。地元の故事来歴に詳しい園部則碩氏から、遠祖が神蔵氏に仕える庭師として紀州から来住したこと(そうであれば香山園の庭園は園部氏のご先祖による造作か)や、「千都の杜」が往時のホウキ城の址に拓かれたこと、五郎坂の名の由来などについて聞いた私は、これらの伝承に感興をおぼえて『町田市史』など諸書を繙いたが、管見にして関係記事を見出すことはできなかった。しかし、正史として紙碑に記されることの稀な鄙の歴史の場合、口碑・口伝の類いと云えども歴史の諸相の一端を伝えている可能性を安易に否定すべきではあるまい、と思い直して、非力をも顧みず伝承を活字にしたのだが、文責は勿論私にある。「千都の杜」を「兵どもが夢の跡」に見立てたこの小稿を「千都の杜」在住の諸兄に披歴してご叱正、ご教示を乞うものである。(了)

